

P2-232 腹膜偽粘液腫合併妊娠の1例

草津総合病院

卜部 論, 卜部優子, 高原得栄

【目的】腹膜偽粘液腫は、虫垂や卵巣を原発として発症し、腹腔内にゼラチン様物質が貯留する疾患である。進行はゆっくりで一般的に発病は40～50代の女性に多いと言われている大変希な疾患である。この腹膜偽粘液腫を合併し、妊娠、出産した報告はほとんど無い。今回我々は不妊治療中に腹腔鏡検査にて腹膜偽粘液腫が見つかり、本人の強い希望にて他院にてIVF-ETにて妊娠した症例の妊娠管理および分娩を扱ったので報告する。【方法】患者は37歳、初産。2003年8月から不妊治療開始。2006年5月に当初PCOの診断にて腹腔鏡検査を行い、腹膜偽粘液腫が見つかる。2006年12月ごろから、卵巣の腫大を認めるが、本人、家族の強い希望にて不妊治療を継続し、2007年10月のIVF-ETにて妊娠成立する。【成績】2008年4月、妊娠32週、腹部膨満著明となり、当院外科へ腹膜偽粘液腫合併妊娠にて入院。腹壁小切開によるドレナージを行い約1000gのゼラチン様の腹水採取。その後婦人科にて管理するが、再び、腹水の貯留も再び増加、胎児の成長もあり、子宮収縮も著明となり、妊娠35週3日 帝王切開施行し、体重2564g男児をApg9にて出産、同時に7kgの卵巣腫瘍摘出と腹腔内粘液除去術施行した。【結論】このような症例の妊娠継続を擁護するにはいくつかの問題もあるが、今回我々は大変希な、腹膜偽粘液腫合併妊娠症例を経験したので、治療の経緯を報告する。

P2-233 婦人科進行癌合併妊娠における計画的な妊娠期間延長についての検討

札幌医大

江坂嘉昭, 石岡伸一, 清水亜由美, 長澤邦彦, 遠藤俊明, 斉藤 豪

【目的】婦人科進行癌を合併した妊娠は稀である。胎児の成熟を目的として、妊娠期間を延長させることの是非については、未だに結論が出ていない。癌による患者の予後への影響がなく、娩出後の児の予後が改善できるならば、計画的な妊娠期間延長は、婦人科進行癌合併妊娠にたいする管理方法の一つになるかもしれない。【方法】1998年1月から2007年12月までに、8名の妊婦が婦人科進行癌と診断された。そのうち5名(子宮頸癌4名、卵巣癌1名)が、計画的な妊娠期間延長を選択した。妊娠経過と母児の予後に関して検討した。【成績】計画的な妊娠延長の期間は、2週間から19週間であった。症状のある妊婦で延長期間が短くなった。進行卵巣癌1名と子宮頸癌1名の2名で、癌による疼痛が管理上の問題となった。他の3名では、管理期間中に、明らかな腫瘍サイズの増大も腫瘍マーカーの上昇もなく、癌そのものによる症状も認められなかった。進行卵巣癌の1名が分娩の後に原病死した。児の予後は、妊娠期間延長群が一樣に良く、胎児死亡も新生児死亡もなく、全ての児が順調に成長している。【結論】児の成熟を待って、計画的に妊娠期間を延長させるのは、婦人科進行癌合併妊娠における妥当な管理方法の一つと考えられる。

4 一般演題
日(土)**P2-234 乳癌に対する妊娠中の手術・化学療法が児の短期および長期予後に及ぼす影響**

聖路加国際病院女性総合診療部

秋谷 文, 佐藤孝道, 斉藤理恵, 塩田恭子, 酒見智子, 真島洋子, 榊原嘉彦, 町田弘子, 小場紀和子, 西澤知佳, 彦坂慈子, 真島 実

【目的】乳癌に対する妊娠中の手術(乳房全摘出術また部分切除術)と化学療法が児の短期および長期予後に及ぼす影響について明らかにすること。【方法】当院で2000年1月から2008年3月までに、妊娠中の乳がんに対して手術(乳房全摘出術2例、乳房部分切除術9例)と化学療法(全例AC療法、ビラルビシン+シクロスファミド、1-4クール)を行った11例について、チャートレビューを行い、出生直後の児の状態(短期予後)や長期的な発育に及ぼす影響を検討した。児の追跡期間は生後9か月から7年に分布した。【結果】手術は妊娠18週以降に実施。化学療法は妊娠20週以降に行い、36週以降に分娩となった。3例がLFD(light for date, 以下LFDと略す)児、8例がAFD(appropriate for date, 以下AFDと略す)児であった。全例に先天奇形は認めなかった。長期的な発育についてみると1児にAsperger症候群があった。【結論】1) Asperger症候群の原因は不明で、治療との関係は明らかでない。2) LFD児の頻度が高く、これは妊娠中の化学療法によってLFD児が増加するとした諸家の報告と一致する。3) 症例数が十分とは言えないが、妊娠中も時期や方法を選択すれば乳癌の治療を児に概ね安全に行いうる可能性があることが示された。